熏風
～教育委員会だより～
第五号　平成二十九年十二月一日(金)
河内長野市教育委員会

～守破離～

早いもので、今年を締めくくる月となりました。

この季節になると、20代の頃に勤務していた学校のことを思い出します。地域の方に注連縄作りを教えていただいたことや餅つき･餅まきを全校児童でしたこと、30代の先生方と６名程で11月頃からマラソンに出場するため、子どもが帰った放課後、練習をしていたことなど。

ところで、現在の学校は若手教員が増え、教員の指導力やミドルリーダーの育成などが叫ばれて数年が経ちます。そのためには、組織で動くことが重要と、「チーム学校」という言葉も出てきました。私の若い頃は、ベテランの先生方もたくさんいましたが、若い先生方も多かったように思います。では、私の20代はどうだったか、何を大事にしていたのかを私自身ふり返ってみました。

私にとって、２人の先生の存在が大きかったと考えます。

初めて教壇に立ったのは、全校児童約５５０名の小学校の３年生のクラスでした。30代前半の学年主任と私より５つ年上の女性の先生と一緒に３年生を持たせていただきました。子どもたちが本当にかわいく、毎日学校へ行くのが楽しみで仕方がなかったことを覚えています。そんな私に、担任として、また学年としてどう進めていくのか、行事計画等を教えてくださいました。初めて通知表を作成するときにこれまでの通知表を貸してくださったり、授業を見せてくださったりした他の先輩先生たち。多くの先生方に支えられていたことを改めて感じます。その時の教頭先生が、その中でも特に大きな存在でした。40才になるかならないかの若い教頭先生でしたが、私だけでなく、先輩先生方からも尊敬されていた先生でした。理科が専門で、学年で話していると、おもしろい実験方法を教えてくださったり、これまでの実践をおもしろおかしく話してくださったりもしました。

ある日、

「小滝くん、教師はおもしろいし楽しいやろ。その上、子どもたちと楽しみながら給料までもらえて。ありがたいよなぁ。」と話しかけられこう続けられました。

「上手に説明しようとせんでええ。授業で話すのは、へ～、ふーん、は～、それで…、でいいんや。」と言われ、「もっと子どもの話を聞きたいと思ったら、どんなふうに聞いたらいい。」と尋ねられました。

私は、よくわからない顔で聞いていたのでしょう。
「授業は、子どもの考えをいかに引き出し考えさせるかや。だから、教師は出てきた意見を上手に交通整理してあげたらいいんや。教師が説明せえなあかん時はもちろんある。でも、子どもの言葉が子どもには１番ようわかるんやから、説明することないんや。そのために、授業の組み立てや発問が大事になる。それをこれから考えていったらええで。」と。
これが、私の授業に臨む姿勢の原点となったことに間違いありません。それ以来、授業をする際、子どもがいかに能動的に授業に参加できるか、子どもへの投げかけを意識するようになったのは確かです。こうして教材研究をしていきますと、教材のよさや単元でつけたい力が見えてきました。授業においても、子どもとのやりとりや指名する順など基本がわかっていったように思います。

『守破離』という言葉があります。教えてもらったことを真似して、工夫してオリジナルを出していくということです。歌舞伎の故中村勘九郎さんは、これについて「型破りと型無し」という表現をしています。基本の形をきちんと学んだ上で、それを打ち破るのは新境地となって良いが、基本の形も学ばずに変わったことをするのは、「型無し」で、身勝手で皆が認める新境地とはならないということです。授業も同じだと考えます。先輩の先生方の真似をして学びながら、教材研究をする中で、自分なりにアレンジしていくことや、オリジナルの指導法を模索していくことが大事ではないでしょうか。
先程の続きになりますが、ある時期、「教科書やプリントに書き込みをする授業」を頻繁にしていました。ねらいは、まず書くことで、自分の考えを整理させます。それを発言し、他の児童の意見と比較することで、一つの言葉や文に鋭くなり、そこから情景や登場人物の気持ちを読み取らせる力をつけたかったのです。この時の基本も、やはり「いかに子どもの考えを引き出し、考えさせるか」でした。
これを人権学習で使ったことがありました。本市にも教育長訪問があるように、橋本市における学校訪問の時でした。先述の教頭先生は、その後、県教育委員会に行かれ、学校訪問の度にご指導いただいておりました。初任から数年後の学校訪問の際、この書き込みを使った授業を見ていただいたのです。校長先生から、今日の学校訪問で、「小滝もやりおるなぁと褒めてくれとったぞ」と聞いた時、少し教師として認めてもらえた気分になったと思ったものでした。
児童生徒にとっても、いきなり独創性を求められるのは、難しいと思います。まず、真似からはじめて、工夫して、徐々に個性が出てくればよいのではないでしょうか。

二人目の方は、注連縄作りをしたりした学校の校長先生です。橋本市教育委員会の課長時代から厳しい指導が有名で、学校訪問に来られると聞くと、自分の教室だけでなく、廊下の電気が切れていないかなど、非常に緊張したものでした。その方のもとで働くことになったのです。

新任４年目で、その校長先生の学校に勤務することになったのですが、校長先生がよく口にされたのが、

「自分がしたいと思うことを存分にやりなさい。うまくいかんかったときは、校長が責任をもって助けるさかい。」

でした。怖いというより安心感があり、子どもや学校にとっていいと思ったことを無我夢中でやっていたように思います。当然、先輩の先生方のご指導や協力を得ながらです。

また、その校長先生は、

「教師は役者にならんとあかん。」

「教師は、大胆なところがなかったらあかん。でも、繊細さを忘れてはいけない。」

とおっしゃっていました。そして、

「今、自分はどう動けばいいか、子どもや学校にとってどうすることがいいのかを考えらなあかん。いろんなことに気遣いができるようにならなあかん。」

とつけ加えるのでした。私はできていなかったのでしょうね。

その頃、ある講演会で、「忙しそうにしている子どもや先生がいたら手伝ったり、困っていたら話を聞いたり、何でもないことだけど、ちょっとした気遣いができるようにならなあかん。それを『気働き』と言うんです」と聞きました。まさに、校長先生と同じです。今風に言うと、『子どもファースト』、『学校ファースト』ですね。

これまで、こうした先輩の先生方に支えられ、教えていただきながら、自分なりに頑張ってきたのだと思います。現在、私は管理職の立場に変わりました。二人の偉大な先輩はもちろん、これまで私を育ててくれた方々のように、これからを担う子どもたちや先生方の力になれるよう『気働き』したいと思っています。

（文責：教育指導課　参事　小滝　孝文）